

『月を抱く夜想宮』

著：嶋田まな海

ill：乗りよう

「どうした？ 俺の顔に見惚れたか」

ザファルが目元を弛ませ穏やかな声で訊いた。

「……まさか」

返す言葉も思いつかず、光はザファルから目を逸らせた。

鼓動が速くなる。悔しいが見惚れていたことは確かだった。

独特な黒い衣装もよく似合うが、ハキームなど比べものにならないほどの貫禄と気品がザファルにはある。雄々しさと、知性と、男の光でさえも目を奪われるほどの精悍な美しさが。

（やっぱりコイツ、格好いい……）

口に出すつもりは欠片もないが、素直にそう思う。

神懸かり的なカリスマ性とでも表現すればいいのか。光の父親の仕事の関係で、国や年齢を問わずそれなりに偉い人物に会う機会は多かったが、こんな男に出会ったのは初めてだ。

「なにか不自由はないか？」

いつになく穏やかな声でザファルが尋ね、光はなぜか動揺した。

「べつにない。ただ、監禁されてるのは気持ちいいものじゃないけどね」

ついぶっきらぼうに答えてしまう。ザファルはそれを気にする素振りもなく、なにか納得した顔つきで頷いた。

「おまえがいることは他の者も知っているし、明日からは離宮の中で自由に行動していい。ただし、部外者は立ち入り禁止の場所もあるから、細かいことはイフラスに訊いておけ」

「え……」

「なにか不満でもあるのか？」

「いや……、ないけど」

（信用されてるってことか……？）

知られたくないことがあるようなのに、そこまで許可してくれることに光は驚いた。監禁生活にはいいかげん退屈していたところだったので、自由に動き回れることは嬉しい。

それから、ザファルは黙って酒を飲み、光から話しかけるはずもないので部屋には沈黙が満ちた。

薄暗い、物音ひとつしない広い空間で、夜の静寂というものを嫌というほど意識する。

だんだん息苦しくなってきた、口を開いたのは光のほうだった。

「もう用がないなら、戻ってもいい？」

「もう少しここにいろ。いるだけでいい」

返ってきた答えにはザファルらしからぬ殊勝さがあり、そのせいか光の身体からいくらか強ばりが取れた。今夜のザファルにはあまり威勢を感じないし、もう少しだけいて

やってもいいかなと思う。

ふと、イフラスの言葉を思い出した。

『あの方はとても重要な役目を担い、ずっと気の休まる時間などありませんでした』

役目というのがなんなのか想像もつかないが、光にはイフラスの言ったことは真実かもしれないという気がした。

アルヤの王宮で出会ったザファルは、夜に紛れて獲物を狩る獣のようだった。そんな恐ろしい一面も持ちながら、一方では貧しい者や部下たちを気にかけるやさしさも持ち合わせている。

たぶん、彼には守るべき多くのものがある、そのためになにかと戦っている。

部下たちの前では常に強者でなければならぬ男には、癒される余裕などないのだろう。

(何者なんだろう、この男……)

イフラスのような側近までいるし、ただの盗賊のわけがない。ザファルという男とその生き方に、光は初めて興味を覚えた。

どこを見るでもなく視線を落としているザファルの横顔を見つめていると、その目がふいにこちらを向いた。

「早く日本に帰りたいか？」

当たり前の質問をぶつけられて、光は少々面食らった。

「それは、帰りたいに決まってる」

「なぜだ？ 母親のオツパイが恋しいか」

「茶化すなよ……、日本には家族がいるし、友人も大勢いる。帰りたいと思うのが普通だ」

なんとなく薄っぺらい答えだと思いながらも、光には他に言いようがなかった。母国というのは自分の居場所ということで、国そのものにこだわりがあるわけではない。

ルナヴィアを大切に思い、自国の民族衣装がこれほど様になっている男には鼻で笑われるかもしれないが。

けれど、ザファルは笑わなかった。

光から視線を外して銀杯を盆に置くと、彼は無表情に酒器から酒を注いだ。

「俺には家族と呼べる者はいない。父も母も、俺が成人する前に殺された」

なんの感情も籠もっていないような声で言う。

淡々としたその様子は逆に彼の心の痛みを感じさせ、光は一言も発することができなかった。どうして、と尋ねることも憚られる。

「なんて顔をしている。おまえがショックを受けることじゃないだろう」

光の反応に対してザファルのほうがフォローするように、薄く笑って杯を口に運ぶ。

こんな告白をしておいて笑顔を見せる彼の、抱えているもの、求めているものの重さを光は思った。

「もしかして、その復讐をしたいと思ってるの……？」

「さあ、どうかな。おそらくそれはないが、少なくとも、その事件が俺の生き方を左右したことは確かだ」

曖昧に答えてから、ザファルは気怠げに頬杖を突いて蠟燭の明かりに目を落とした。

「だが、時々これでいいのかと迷いが出る。俺の言葉や行動が、俺だけでなく他の人間をも巻き込んでいく。無関係の人間の人生さえ変えてしまう……、そのことが……」

言いかけて、ハッとしたように口を噤んだ。

ザファルは自嘲するように微笑んで、頬杖を突いていた手で額を押さえる。

「少し酔ったらしい。今のは忘れろ」

(そうだ……、俺には関係ないことなんだ)

日本に帰ってしまえば、ルナヴィアともザファルともなんの関係もなくなる。それは遠い別世界の話で、もう二度と会うこともなくなるのだから。

この乱暴でスケベな男のことなど忘れて、光は普通に生きていく。

それが望みだった。ザファルのことなんか嫌いだ。

心からそう思っているはずだというのに――。

「欲しいものはなんでも盗むんじゃなかったの」

ほとんど無意識に、光はそんな皮肉を口にしていた。

ザファルが怪訝そうな表情で顔を上げる。なにやっつた俺はと思いつつも、一度言葉にしたなら止められなかった。

「あんたがなにをしたいのかなんて俺は知らないけど、たぶん、あんたが進むべき道はひとつしかないんだろ？ 考えて決めたことなんじゃないの？ だったら、絶対に負けられない戦いなら勝てばいい。あんたは心の底では、自分がなにかに負けるとか失敗するなんて、これっぽっちも考えてないんだ。そういう凶々しい男だろ」

どんな状況でも、この傲岸不遜を絵に描いたような男が敗北するはずはないと思った。どうしてなのか、光自身がザファルのそんな姿を想像したくなかった。

「イフラスも他の人たちも同じ思いなんだよ。あんたが必ず勝つて。だから、あんたについていってる。難しく考えなくても、それでいいんじゃないの？」

一気にそこまでまくし立ててから、冷静にザファルと向き合った光は頭から血の気が引いた。

灰青色の瞳が瞬きひとつせずに光を見つめている。怒っているとも呆れているとも取れるような、冷ややかな色だった。

(ヤバイ、余計なこと言いすぎた……)

「ごめん！ 俺、部外者なのにこんな、偉そうに……」

絨毯の上で居住まいを正した光に、ザファルが無言で詰め寄る。

手にしていた銀杯が落ちて絨毯に酒が零れた。

(え……)

気がつくやうに、光はザファルの両腕で強く抱きしめられていた。

なにが起きたのか理解できず、彼の衣服に顔を埋めて放心する。部屋を満たす香に、ザファルの汗と灼熱の砂の匂いが混じる。

「やはりおまえを攫ってきてよかった。ハキームなんかにはもったいない」

光を抱く腕にさらに力を込めて、ザファルが耳元で熱く囁く。

「おまえが欲しい。おまえの身体も心も、すべてを俺のものにしたい」

「あ……」

光の身体の奥でなにかがズキンと疼いた。

ザファルから与えられたキスや愛撫の感覚がリアルに蘇り、呼吸は荒く、鼓動は速くなる。

どうすべきなのか考えられずにいるうちに、ザファルの手が頬に添えられ上向かされた。キスされるのだと気づいたとき、光は咄嗟にザファルの身体を両手で押してい

た。

本文 p84～90 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>